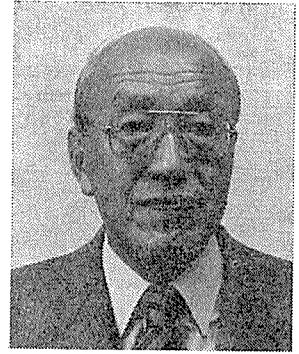


(社) プレストレストコンクリート 技術協会創立 30 年を迎えて

猪 股 俊 司*



当 PC 技術協会が昭和 33 年 2 月 1 日に故吉田徳次郎、坂静雄、故平山復二郎ほか諸先生の御尽力によって設立され、30 年を迎えることは誠にめでたいことと心からお祝い申し上げます。当協会創立当初から役員として関係し、昭和 62 年 5 月の総会を機に会長を辞すまで、役員を務めた者として感無量のものがあります。

協会誌は昭和 34 年 1 月に Vol. 1, No. 1 が私が編集委員長の時発刊されております。創刊の辞を初代会長の故吉田徳次郎先生に頂戴しておりますが、その中で先生は次のように述べておられます。

「プレストレッシングの応用できない土木、建築のコンクリート構造物はまずないと考えられます。」また、「不静定 PC 構造物の設計には弾性理論が応用されていますが、これでは PC 材料を完全に利用することができないのでありますから、極限強度設計方法を PC 構造物の設計に応用することが特に重要で緊急であります。」

すなわち 30 年前既に故吉田徳次郎先生は現在の PC 技術応用分野の拡大（(社) PC 建設業協会資料によれば昭和 60 年総受注額は 2329 億円に達しております）、またコンクリート構造物設計法の限界状態設計法への移行を予見されていたのであります。このような先生を当協会初代会長にいただいたことは誠に幸運であったと思います。

協会誌発刊は PC の工業化、実用的現場施工、等が始まって 6 年たらずの時代でありましたのに、PC 技術の普及を図ることを目的として故吉田徳次郎会長の御指示によって創刊号を出すこととしたのであります。当初正会員数は 370 名弱であり、PC 業会の会員とわずかな大学関係会員に限られ、Vol. 1 は年 4 冊でありました。Vol. 2 からは年 6 冊としましたが、それでも正会員数は 380 弱に過ぎませんでした。その後 PC の普及とともに会員数も増加し昭和 41 年頃には 1400 に達しながら、業会賛助会費の減額もあって、会誌 Vol. 8, 9 は年間

4 冊、Vol. 10, 11 で 5 冊とその発刊回数を減少しなければならぬ困難な時代もありました。その後は順調に年間 6 冊となり、有益な PC 技術に関する学術誌となっていることは長年編集委員長を務めた者として誠に喜ばしいことであります。

当技術協会は日本を代表し FIP (Fédération Internationale de la Précontrainte) の会員にその創立当時から加入しております。世界の PC 技術進歩発展に協力する必要があり、1974 年第 7 回 FIP 国際会議（ニューヨーク）から 4 年ごとの FIP 国際会議（第 8 回 ロンドン、第 9 回 スtockホルム、第 10 回 ニューデリー）に、国内 PC 構造物の写真紹介とともに英文論文を特集した特別号を発行し、会場で出席者に無料で配布しております。これは日本の PC 発展の現況と学術研究の状況とを広く世界に知らしめるのに大いに役立っております。FIP 会員としては当然なすべき世界の PC 技術への貢献努力の表われであります。世界的にも高く評価されております。勿論当協会には相当な経済的負担ではありますが、今後も続けていただきたいものであります。

現編集委員長池田横浜国立大学教授の並々ならぬ御努力によって Vol. 28 からは定期刊行誌のほかに特別号を毎年発行することになりましたことは会員へのサービスとして誠に喜ばしいことであります。協会誌の充実発展なしには協会自体の繁栄もありえないものと思われま

す。現在正会員数は未だ 3000 弱でありまして、国内 PC 工事総受注額に比較すると、少なすぎると思われます。大学によっては土木建築の学生で PC に関する講義らしい講義も受けずに卒業する者も相当数あると聞いております。当協会としてはさらに PC 技術を普及させるため、学生用の啓蒙パンフレットの類を用意し、広く大学の講義に利用できるような方法を考え、会員増に努力する必要があります。この問題は私が協会役員時代から話は出ておりましたが、困難な問題でなかなか実現で

* (株) 日本構造橋梁研究所代表取締役会長
(本協会第十五代会長)

きなかったことは残念であり、申し訳ない次第でもあります。

年次研究発表会を昭和 35 年より年一回開催し、さらに昭和 46 年 11 月東京、大阪で「PC 構造物の設計法と現況」なる題目で講習会を開催、会員、非会員を問わず多数の参加を得ました。その後定期的に PC に関する講習会を国内主要都市において開催し、PC の最近の発達に関する啓蒙に努めていることは慶賀にたえません。これは当協会を広く認識してもらうため非常に大切な行事であります。私自身当初から毎回講義用原稿を書いてきましたが、毎回題目を変えての執筆はなかなか大変なことでありましたが、PC 技術者の裾野を広げるのに多少なりともお役に立つならばと続けて参りました。幸い現在では（社）PC 建設業協会の絶大な御援助をえて年間 3000 名をこえる聴講者を動員できていることは、この種技術講習会としては大成功であると思われます。

PC に関する諸技術は日進月歩の感があります。特に各種社会事情、経済事情の変化にともなって、PC 材料、構造物施工法ひいては設計法にも当然変化がおきてきています。先進諸国でのこの種変化は著しいものがありますので、この方面の紹介もまた当協会の重要な責務かと思われます。

先に述べましたように当協会は日本代表として FIP に加入し、公式の National Group として認められております。また当協会代表者は自動的に FIP 副会長となる規約があります。長年当協会を代表して FIP 副会長を務めて参りましたが、年 2 回開催される FIP 役員会にも地域的、経済的理由でなかなか出席困難であったことは誠に申し訳ない次第であります。

FIP には各種技術委員会があり、日本からも多くの委員会に参加している次第であります。FIP 耐震委員会は初代委員長を武藤清先生が、2 代委員長を坂静雄先生が、第 3 代を私が、第 4 代を現在中野清司先生が務め、代々日本でしめております。1964 年アラスカ地震で PC 建築物に多大な損傷が生じたことから、PC は耐震的

ではないのではないかとの論議がおこり、FIP は耐震委員会を設け研究することとなったのであります。1966 年第 5 回 FIP 国際会議（パリ）で武藤清先生が委員会報告を、1970 年第 6 回 FIP 国際会議（プラハ）で第 2 代委員長坂静雄先生が PC 耐震設計指針に関する報告をされました。

1974 年第 7 回 FIP 国際会議（ニューヨーク）で第 3 代委員長の私に「PC 構造物耐震設計指針」をまとめるよう要請があり、1977 年同 FIP 指針として出版されました。以上のように当協会は PC の耐震に関しては FIP の信頼を得ており、この方面での世界的貢献が期待されております。したがって第 4 代中野清司委員長がその力量を十分発揮できるよう協会として大いにバックアップしていただきたいものであります。

日本の PC 工事量は相当なものでありまして世界から注目されております。したがって当協会としても FIP の Congress または Symposia を日本で開催すべき時代に来ていると思われます。また FIP の役員の方々からも個人的にいつ日本が開催してくれるのかと話の出る情勢になっておりました。昭和 61 年 2 月ニューデリーでの FIP 役員会で 1994 年 Congress 開催を日本で招待したいと私から申し出たのですが、同時にアメリカ代表からも同じ申し出がなされました。

昭和 61 年 10 月ウインでの FIP 役員会において、私の力及ばず 1994 年 Congress はアメリカ・ワシントンと決定、日本では 1993 年 Symposia 開催となりました。同時に Congress におとらぬ盛大な Symposia となることを特に期待するとの FIP 会長 Dr. Wittfoht（西独）の発言がありました。私の力量不足のため Congress を日本に招待できず誠に申し訳ないことであります。しかし 1993 年 FIP Symposia 開催は日本開催と決定しましたので、これを成功させるための準備は今から始める必要があると思います。私が言い出したことでもあり、これからも大いにお役に立ちたいと考えておる次第であります。